

早稲田大学 オープンカレッジ 2022年10月22日

日本が資源輸出国だった時代

石見銀山遺跡を中心に【寄藤 昂】

1. はじめに

「石見銀山遺跡とその文化的景観」が2007年に世界遺産に記載された。

近世の日本において「銀」は最重要の輸出産品と一つとなっていて、石見銀山を中心とする「採掘—精練—輸送—船積み」の体制と施設群はその最大の拠点であった。

日本が「金・銀・銅」などの輸出国であった時代について技術的背景を含めて考える。

1.1 世界遺産登録の概要

「石見銀山遺跡とその文化的景観」

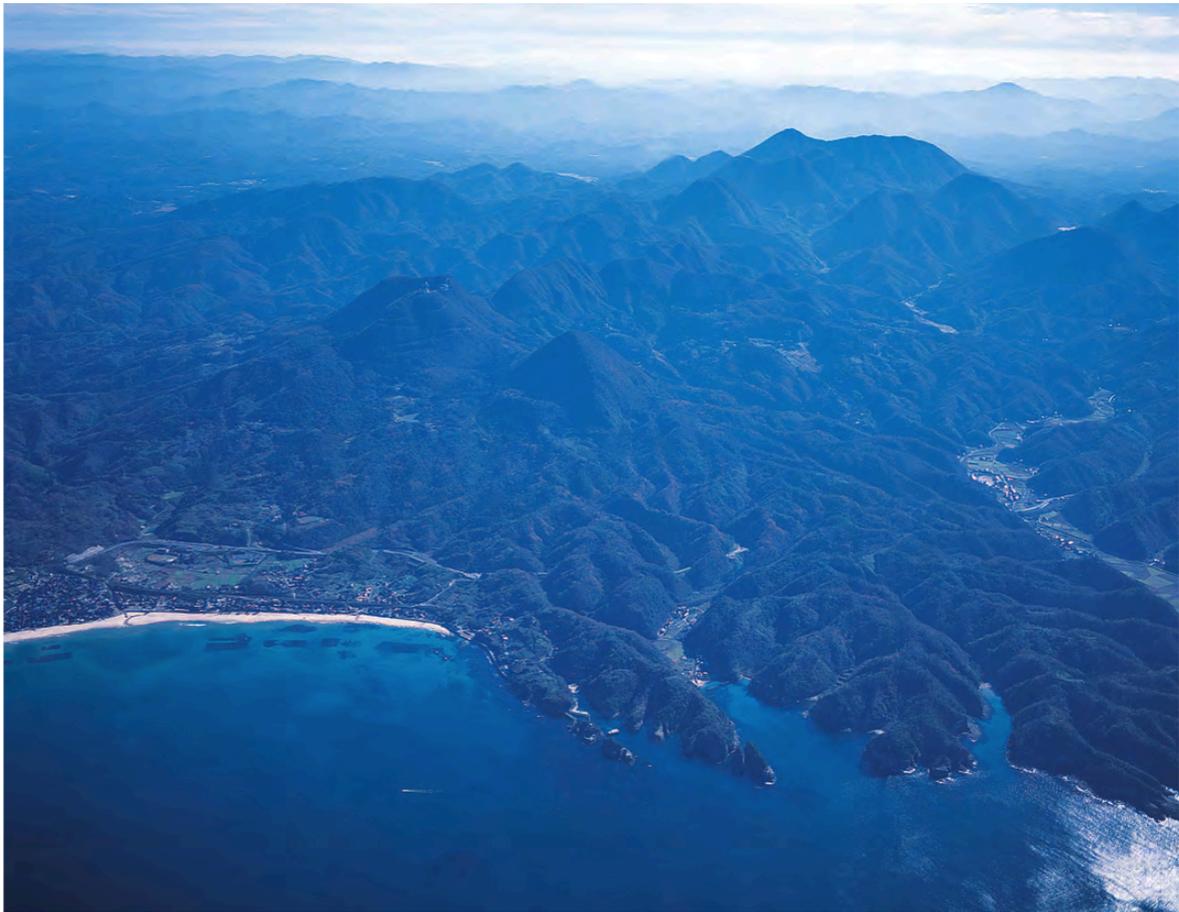
石見銀山は近代以前のアジアにおける銀山の草分けであった。

中国から韓国を経て伝わったアジアの灰吹法の改良と16世紀の日本の独特な労働集約型小規模生産システムを通して、高品質な銀の大量生産を達成、西洋と東洋の価値の交流に貢献した。

鉱山遺跡と集落、山城、街道、湊により構成され、銀採掘活動に伴う独特な土地利用を特徴的に示している。

銀鋳石（資源）の枯渇により、その生産は終わりを迎えたが、特徴的な豊かな自然と銀鋳山に伴って発展した文化的景観は残存することとなった。

所在地は、現在の島根県大田市。（大田は 'おおだ' と読む）

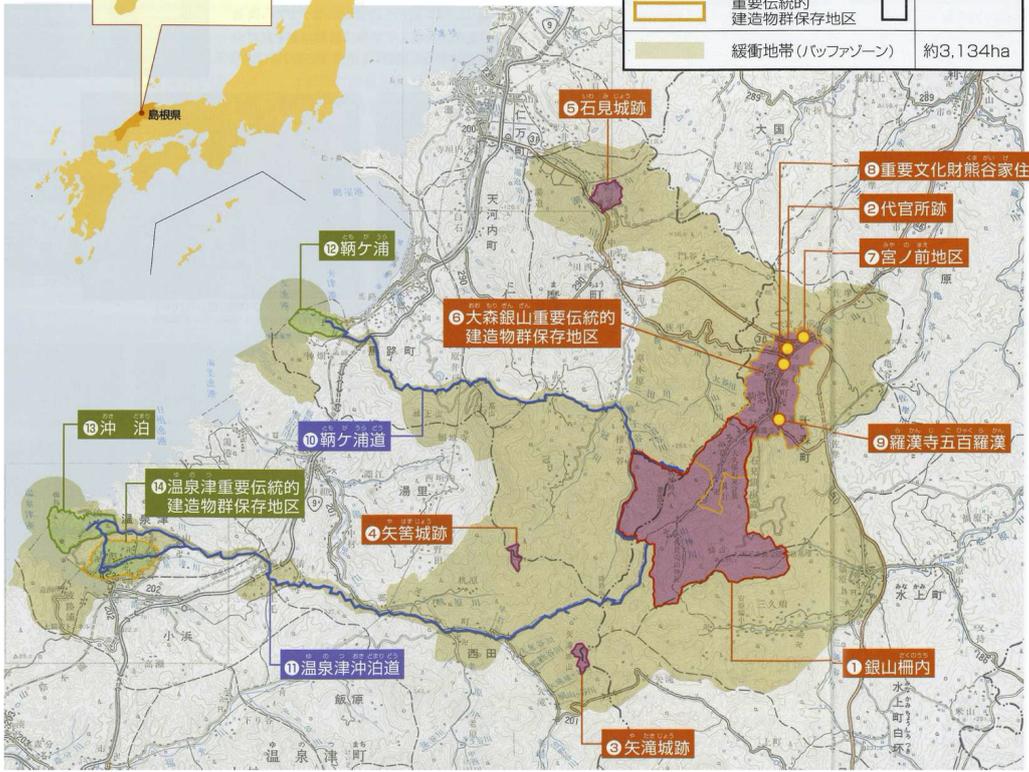


1.2 構成資産

- 1 銀鉱山跡と鉱山町（銀生産が行われた鉱山と鉱山町）
 - A 銀山柵内
 - B 代官所跡
 - C 矢滝城跡
 - D 矢筈城跡
 - E 石見城跡
 - F 大森・銀山
 - G 宮ノ前
 - H 熊谷家住宅
 - I 羅漢寺五百羅漢
- 2 石見銀山街道（銀と物資輸送のための二つのルート）
 - A 鞆ヶ浦道
 - B 温泉津・沖泊道
- 3 港と港町（銀の積出しと物資搬入にかかる港と港町）
 - A 鞆ヶ浦
 - B 沖泊
 - C 温泉津



項目	面積
銀鉱山跡と鉱山町 石見銀山街道 港と港町 重要伝統的建造物群保存地区 緩衝地帯(バッファゾーン)	史 資 産 約529ha ※重複部分除く 約3,134ha



1.3 ここでは、さらに「何」に注目するか

戦国期～江戸期、全国の鉱山開発はどうだったのか。

貨幣その他、貴金属類はどう使われたのか。

金・銀・銅はどのように海外に "輸出" されたのか。

2 構成資産

2.1 銀山柵内

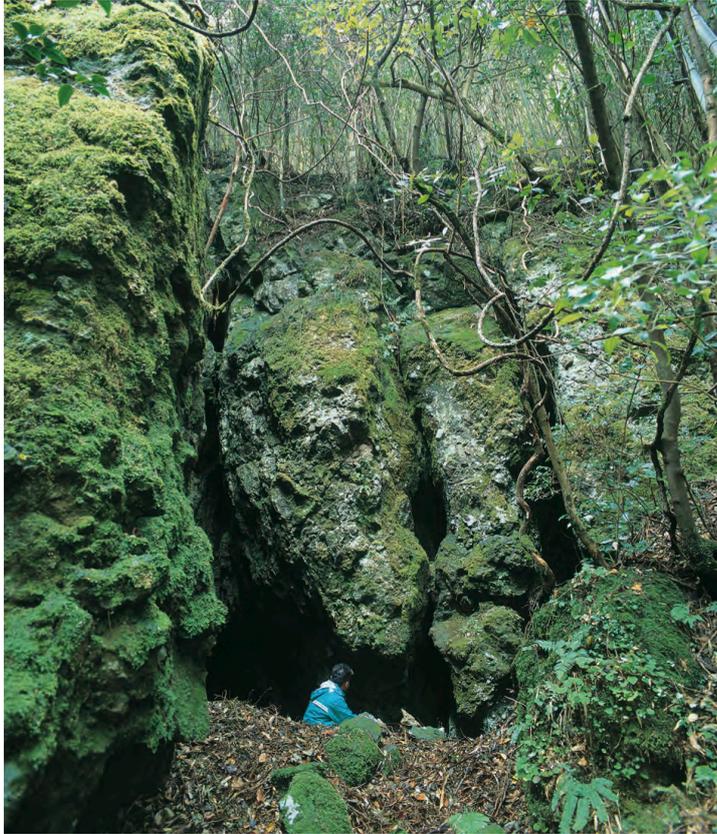
「銀山柵内」は、面積約320haの銀鉱山跡である。ここでは、採掘から選鉱・製錬・精錬に至る銀生産の諸作業が一貫して行われていた。

採掘の跡は銀を埋蔵した仙ノ山のほぼ全山に及び、現在までに600ヶ所以上もの地点において確認されている。それらは、地表面に残る露天掘り（樋押掘り）の跡と、鉱脈を地中に掘り進んだ坑道掘りの跡の2種類に大別でき、露天掘りの跡は仙ノ山の山頂付近からその南側に位置する谷筋一帯によく残っている。

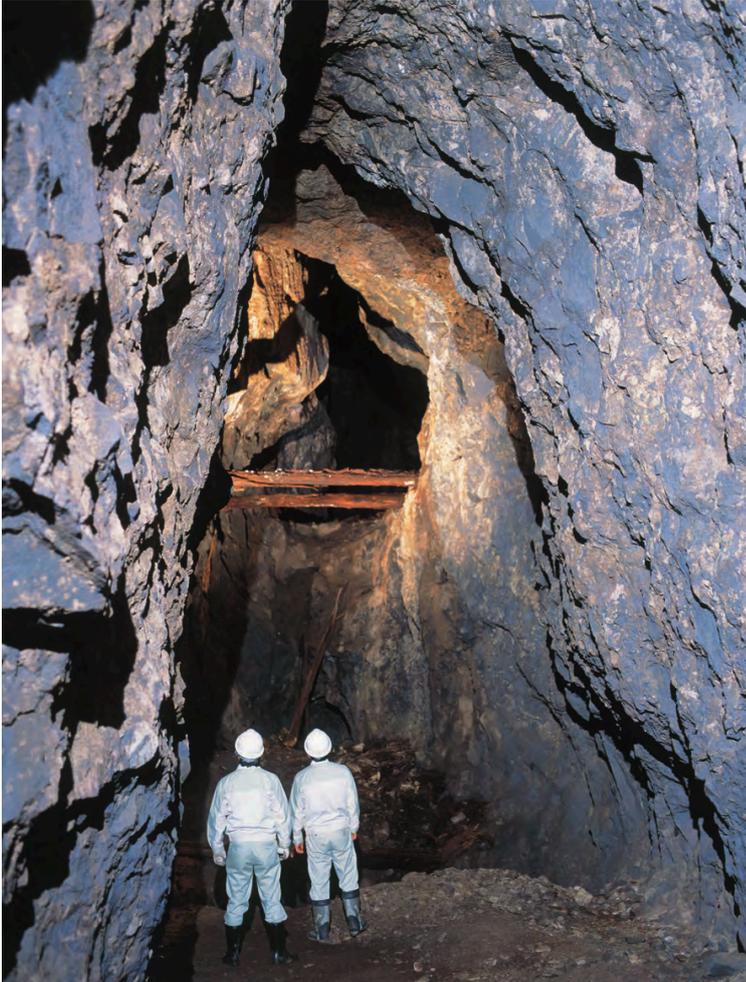
坑道掘りの跡は銀山柵内の谷部のほぼ全域に見られ、代表的なものには仙ノ山南側の大久保間歩や釜屋間歩、同北麓の龍源寺間歩などがある。これらの間歩は石見銀山の最盛期に開発された大規模な坑道の事例であるが、その他の坑道の多くは平均的な坑口の規模が縦約90cm、横約60cmの小規模なものである。



銀山柵内 本谷の様子



銀山柵内 樋押掘りの跡



銀山柵内 大久保間歩

2.2 代官所跡

「代官所跡」は、17世紀から19世紀半ばまで石見銀山と周辺地域の150余村を支配するために、江戸幕府が代官を派遣して現地に置いた役所の跡である。

敷地面積は2,657㎡あり、瓦葺き平屋建ての表門とその左右に付随する門長屋建物が現存する。現存建物の規模は幅約4m、総長33mである。1800年に起こった大火の後の1815年に建築されたもので、当時の棟札が現存するほか1841年製作の古絵図にも描かれている。



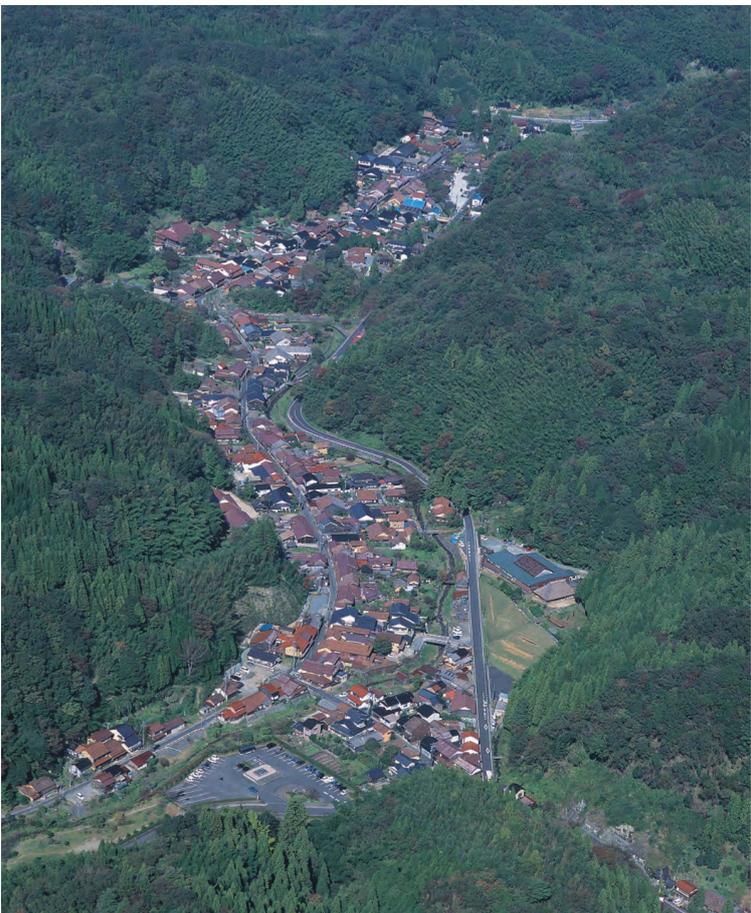
代官所跡

2.3 大森の街並み

大森地区は、17世紀以降に柵の東外側に形成された今一つの鉾山町である。

17世紀に大森地区に代官所が設置されて以降、銀山地区から支配の拠点に移され、19世紀にかけて石見銀山支配の中心となった場所である。

地区内には、街路に沿って支配に携わった代官所役人の屋敷、銀山経営や金融業に携わった熊谷家住宅などの有力商人の屋敷、中小の商人の店舗付き住宅、職人の住居などが建ち並んでいた。



2.4 熊谷家住宅

「熊谷家住宅」は代官所跡から南西方向に向かって50mの地点に位置し、大森・銀山の街路に面して建つ建築物の中でも最大の町家建築である。

熊谷家は遅くとも17世紀には銀山柵内に住み、銀山の経営を行っていたものと伝えられている。その後18世紀初頭には現在地に移住、金融業や代官所の御用商人を勤めた。19世紀になると町役人に就任、19世紀後半には酒造業も営み、大森・銀山の中で最も有力な商家の一つとして繁栄した。



熊谷家住宅（外観）



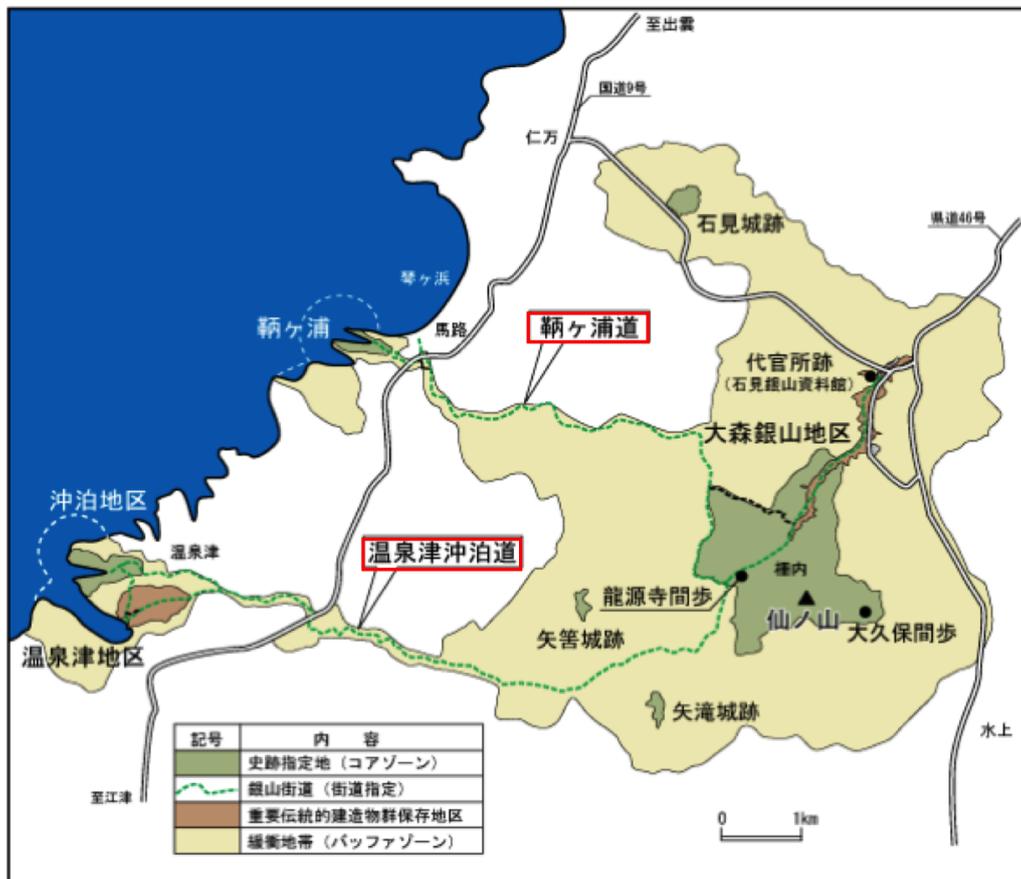
熊谷家住宅（内部）

2.5 二つの石見銀山街道

「街道」は、銀鉱山・鉱山町と港・港町の間を結び、銀鉱石及び銀と諸物資の輸送を担う重要な役割を果たした。

「石見銀山街道 鞆ヶ浦道」は、銀山が開発された16世紀前半に、銀山から搬出港があった鞆ヶ浦へと銀鉱石及び銀を運搬した道で総延長約7.5km、銀鉱山と日本海を結ぶ最短距離の経路であった。この街道は全行程が起伏に富んでおり、通行を容易にするために行った道普請の跡が良好に遺存する。

「石見銀山街道 温泉津・沖泊道」は、16世紀半ばに銀山の支配者が交替したのを契機として、日本海岸への銀の輸送路として利用された道である。銀山柵内の西端から沖泊及び銀山とその周辺地域の支配の拠点があった温泉津へと通ずる総延長約12kmの道である。この街道は、銀の搬出路として機能したばかりでなく、銀の搬出が陸路へと移行した江戸時代以降は、銀山で必要とされる物資の搬入路として盛んに利用された。一部を除いて比較的なだらかであり、途上には石段などを用いて整備した道普請の跡が良好に遺存する。





石見銀山街道 鞆ヶ浦道



石見銀山街道 温泉津・沖泊道

2.6 鞆ヶ浦と沖泊

「鞆ヶ浦」は16世紀前半に日本最大の貿易港であった博多に向けて銀鉱石及び銀を搬出、「沖泊」は16世紀後半に鞆ヶ浦に代わって銀を搬出した港である。

いずれも、西向きに開口したリアス式海岸の小湾と狭い谷間の傾斜地を利用して港と小集落が形成され、湾頭に位置する風波除けの小島、入り組んだ小湾を利用して形成された碇泊場所、船舶の荷上げや荷降ろしが行われた湾奥部の浜辺、船舶への給水に用いられた井戸など、船舶輸送に関連する様々な施設が遺存する。



鞆ヶ浦（中央の小さな入江）



鞆ヶ浦の港



沖泊（中央の入江の奥）



沖泊の港

2.7 温泉津

「温泉津」は、古くからよく知られた温泉地であるとともに16世紀以前から日本海沿岸の主要な港であり、銀山で必要とする物資を搬入した港であった。

西側に港を控え、石見銀山街道温泉津・沖泊道に繋がる街路を中軸として短冊形地割に基づく町並みが展開、温泉旅館・店舗付き住宅・廻船業者の邸宅をはじめとする和風建築が建ち並び、その背後には寺院・神社など信仰関連施設が位置する。



温泉津の街並み



温泉津の街並み



温泉津の旧廻船問屋屋敷（内藤邸）

3. 戦国期～江戸期の鉱山開発

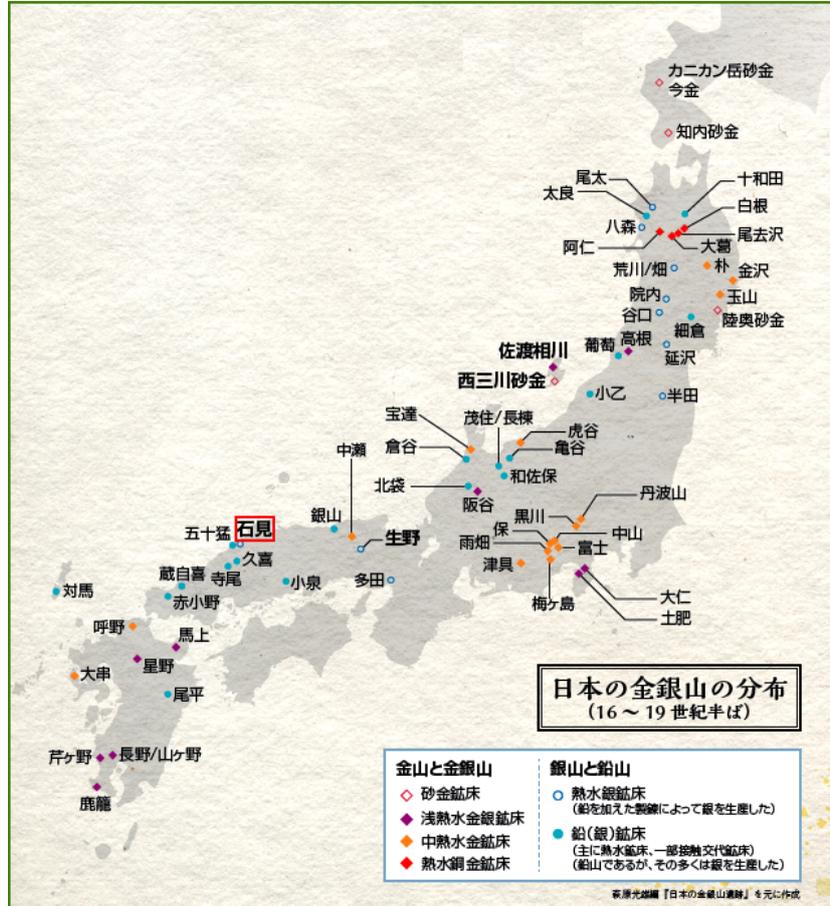
3.1 概要

マルコ・ポーロが「黄金の国（ジパング）」と呼んだ日本は、金銀などの鉱物資源や燃料となる森林資源に恵まれ、江戸時代以前から世界有数の鉱業国だった。

もともと日本では砂金が採れる場所があり、佐渡や伊豆でもそのことが知られていたが、本格的に「採掘」された最も古い金属鉱山は1542年に採掘が始められた生野銀山と考えられる。

これに1546年の石見銀山、1577年の伊豆金山が続くが、17世紀初頭になると佐渡金山（1601年）、院内銀山（1606年）、足尾銅山（1610年）など、全国で多くの鉱山開発が始まった。

この中で、久保田藩が管理していた院内銀山を除く、生野・石見・伊豆・佐渡・足尾の5つの鉱山が江戸幕府の直轄となっている。



3.2 生野銀山と院内銀山

生野銀山は1542年（天文11年）但馬国の守護大名山名祐豊が本格的な採掘を開始、この時石見銀山から採掘・精錬技術を導入したとされる。

信長・秀吉・家康ら時の権力者が直轄地とし、三代将軍家光の頃に最盛期を迎え、月産150貫（約562kg）の銀を産出している。

慶安年間（1648年～1652年）頃より銀産出が衰退し、江戸中期には銀に換わって銅や錫の産出が増加した。

明治元年（1868年）から日本初の政府直轄運営鉱山となり、フランス人技師長ジャン・フランシスク・コワニエらの助力を得て先進技術を導入、近代化を進めた。

明治22年（1889年）から宮内省所管の皇室財産となり、明治29年（1896年）に三菱合資会社に払下げられた。

院内銀山は1606年（慶長11年）に村山宗兵衛らにより発見された。金及び銀を産出し、江戸時代を通じて日本最大の銀山であった。

久保田藩（秋田藩）が管理、藩の財政を支える重要な鉱山であったが、江戸時代中期、鉱脈の枯渇により一時衰退するも、1800年以降新鉱脈発見で回復した。

最盛期には、戸数4,000、人口15,000、城下町久保田（現在の秋田市）を凌ぐと言われた。

明治時代に入ると経営権が工部省に移り、1884年（明治17年）には工部省から古河市兵衛に払い下げられ、古河の近代的な鉱山経営によって銀の産出量は増加した。

明治時代には日本第4位の銀山であった。

3.3 佐渡金山

11世紀後半には砂金が産出する島として知られていたらしい。

1601年（慶長6年）徳川家康の所領となるが、同年金北山で金脈が発見され、以降江戸幕府の重要な財源となった。

江戸時代における最盛期は初期の元和から寛永年間にかけてで、金が1年間に400 kg以上算出されたと推定されている。銀についても1年間に1万貫（37.5トン）幕府に納められたとの記録がある。当時としては世界最大級の金山、銀についても日本有数の鉱山であった。

江戸中期以降は衰退、江戸時代中に繁栄は戻らなかったが明治初期から官営に、1889年から宮内省御料局の所管となった。

明治政府は1869年（明治2年）西洋人技術者を派遣して火薬採掘や削岩機、揚水機といった西洋の近代的技術の導入を開始、これにより産出量が再び増加に転じはじめた。

1885年（明治18年）政府はさらなる増産を目指してドイツの新技術を導入、1896年生野鉦山などと同時に三菱合資会社に払下げられた。

4. 海外貿易と銀

4.1 戦国時代～鎖国まで

- 1530年代～ 石見銀山の本格的な開発で銀が増産され、
朝鮮王国との交易手段として大量に用いられる。
- 1540～49年 中国の福建・広東・浙江省方面の船が日本へ来航
するようになり、日本銀が流出。
- 1549年 イエズス会のフランシスコ・ザビエルが上陸、
キリスト教を布教。
- 1561年 バルトロメオ・ヴェリュ「世界図」上の日本の
本州部分に銀鉱山が2ヶ所記載される。

- 1581年 スペインに反乱起こしたオランダが独立宣言
- 1568年 フェルナン・ファズ・ドラード「日本図」上の石見付近に銀鋳山王国と記載される。
- 1595年 ルイス・ティセラ「日本図」上の石見付近に銀鋳山と記載される。
- 1600年 オランダ船フリーデ号が豊後国臼杵（現大分県臼杵市）の海岸に漂着
ヤン・ヨーステン、ウィリアム・アダムス（英人）らが上陸、家康に召抱えられる。
- 1602年 オランダ東インド会社設立。

1600年代初頭 日本の朱印船が東南アジア海域の交易で活躍。

1609年 オランダ東インド会社の船が平戸に到着、
家康を表敬して朱印状を得る。

1609年 オランダ東インド会社が平戸にオランダ商館を設立。

4.2 江戸時代

1639年 鎖国の完成。以降19世期半ばまで日本は
中国・オランダとのみ貿易。
主な輸入品は中国産の生糸、絹織物、砂糖、
香木、胡椒、鮫皮、薬品など。
輸出品は初期には「銀」（1868以降は禁止）
「金・おもに小判」（1763年禁止）
その後は「銅・棹銅」が主体、陶磁器、漆器
などの工芸品もあった。

銀の輸出とその禁止

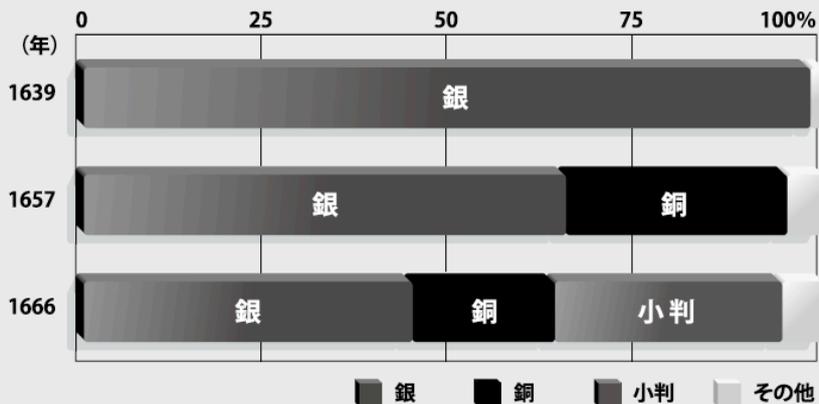
オランダ船による貿易では、主に日本の銀が輸出され、アジアの生糸などが輸入された。

1635年～1641年

大量に銀が輸出される

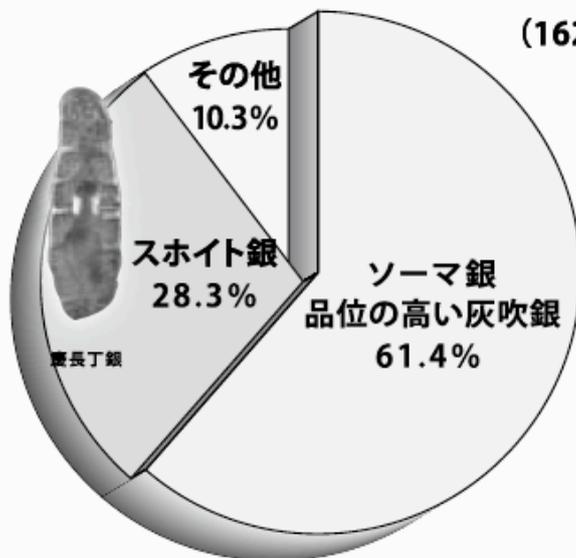
幕府は国内の銀貨不足を懸念し、銀輸出抑制策をとり、銅や小判の輸出が緩められた。

日蘭貿易輸出額の内訳



オランダ商館の帳簿にみる日本産の銀

(1622~35年)



輸出額は、当初、品位の高い灰吹銀（ソーマ銀）の割合が高かったが、幕府の貿易統制により1635年以降丁銀（スホイット銀）のみが輸出された。

銭貨の輸出とその禁止

17世紀初頭

日本でつくられた大量の銭貨の輸出 東南アジアへ

オランダ商館の帳簿にみられる銭貨

sakamotta (坂本〈地名〉)

erack (永楽通宝)

mito (水戸〈地名〉)

オランダ人は京都や大坂などの商人から、銭貨を銅地金などと共に仕入れていた。

1636(寛永13)年～

寛永通宝鑄造



材料確保

1637(寛永14)年

銅の輸出禁止

1646(正保3)年

銅の輸出再開

幕府の長崎貿易政策と銅の輸出再開

1637年に禁止された銅の輸出は、1646年に再開された。1668年銀の輸出が禁止されると、銅はオランダ貿易でもっとも重要な輸出品となっていった。

1646(正保3)年 銅 幕府統制下で輸出再開

1668年 銀の輸出禁止
1670年代 金の輸出価格引き上げ

1673(延宝元)年 輸出品、銅が最大に

1685(貞享2)年 中国・オランダとの年間貿易額を制限

金銀の流出を抑える一方で
銅や海産物を中心とした交易

1715(正徳5)年 年間貿易額・貿易船数を制限(正徳新例)

新井白石の時代(18世紀初頭)になると貨幣材料(金・銀・銅)の流出を防ぐため、その最大の要因である生糸や砂糖などの輸入依存からの脱却を目指し、輸入品の国産化などの政策が進められた。



さねどろ
棹銅

(住友史料館所蔵)

純度が高い棹状の精銅。
インドや東南アジア向けの輸出品として好まれた。



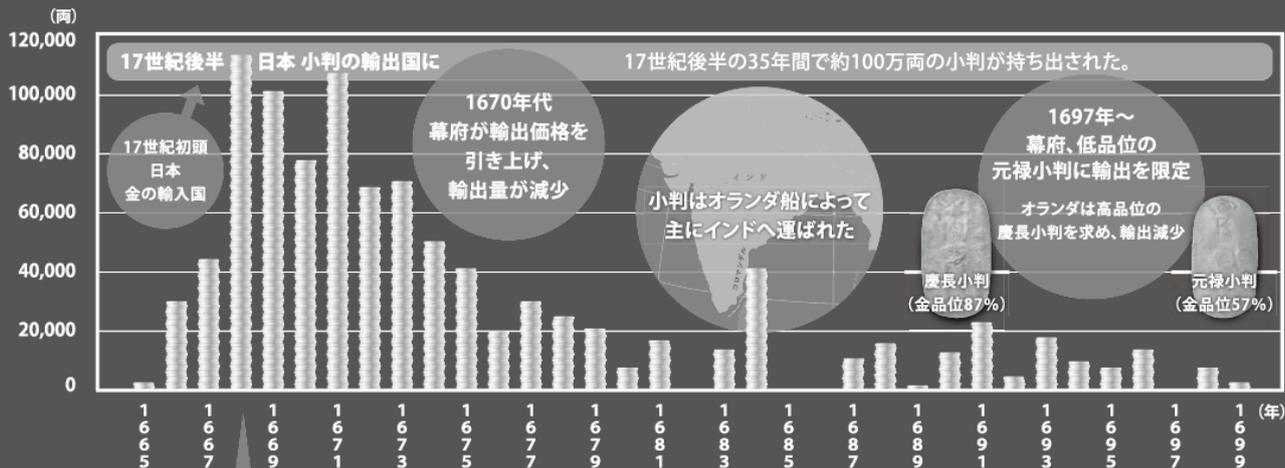
『青蘭館絵巻』19世紀(長崎歴史文化博物館所蔵)

長崎における銅の輸出風景

オランダ貿易における小判(金貨)の輸出(17世紀後半)

1668年の江戸幕府による銀の輸出禁止令により、オランダ貿易での輸出は、小判と銅へと変化した。

にちらん 日蘭貿易における小判輸出額推移



銀の輸出禁止
小判の輸出急増

グラフ全て鈴木康子「近世日蘭貿易史の研究」より作成



無文銀銭

8~11世紀

国内の銀の産出は少ない



和同開珎銀銭

律令国家による銭貨の発行



砂金・自然金

金貨

川など地表面から採れた砂金や自然金(川金・柴金)の利用



開基勝宝

12~15世紀 銅銭(渡来銭)の使用

16世紀

戦国大名による金銀山の開発



石州銀

石見銀山の開発をきっかけに鉱石から金銀を採り出す技術が向上



讓葉金



姪藻金



甲州金

判状の金貨

鉱石から採り出した金(山金)を利用

領国貨幣
(甲州金・石州銀)



天正菱大判



武蔵墨書小判

墨書のある金貨

徳川氏による金銀山の直轄化

17世紀

重さや額面・品位が統一された金貨

重さをはかって使う銀貨
(秤量銀貨)

銀貨



慶長銀(丁銀・豆板銀)

家康・江戸幕府による統一貨幣



慶長金(大判・小判・一分金)

洋銀を日本へ持ち込み
日本の銀貨と交換

洋銀4枚



日本国内で銀貨を
金貨に交換

天保一分銀12枚



天保小判3枚



日本の金貨を海外で
洋銀に交換

洋銀12枚



洋銀1枚＝一分銀3枚と交換可能
日本と外国の銀貨を
同種重量で交換

一分銀4枚＝小判1枚と交換可能
江戸時代の貨幣制度で4分＝1両

小判1枚＝洋銀4枚と交換可能
海外では銀に対する金の価値が
日本の3倍もあった